

P1-034

生後1ヶ月からの記録で発達の偏りが表現されていた初診時4歳の自閉症スペクトラム

関 千夏

独立行政法人国立病院機構東長野病院 小児科

医療機関は患者が受診するまで、その存在に気づくことができず、治療や支援を開始することができない。当院の発達支援外来は、保健所、保育園幼稚園、小中学校からの紹介受診が多いが、経緯を伺うと、受診の機会をにがしていただとを感じる症例が存在する。症例は4歳で初診した母の育児記録で、生育歴だけでも、十分に発達障害を想定しうる症例について報告する。生後1ヶ月頃から、睡眠不安定、離乳食開始の困難さ、偏食、遊びの偏り、音の過敏、模倣動作の遅れ、周囲にいる人への関心の不均一さ、様々なこだわり等、成長とともに変化はありながら出現していた。これらの行動は定期的な健診時に、保健師や相談員に相談しているが、母親の実感としては、話を十分に聞いてもらったがどうしたらいいのかは言ってもらえなかった、様子を見る、と終結して、母親には不安があったままであった。相談した機会は複数回あったものの、母親の自主性が求められて、迷っている時間も存在した。一方で、保健所側が一定の継続観察としていたかどうか不明である。3歳に幼稚園入園し、集団生活および集団課題への関心の低さや、取り組みの困難さから、入園当初から相談体制がとられ、半年毎に支援会議がなされた。しかし、母親には、具体的なつまり発達障害を考えての母子支援が始まったとは捉えられていなかった。幼稚入園半年後、医療機関の受診を勧められて、初診に至った。母は、医師から発達障害が考えられ、こだわりや、コミュニケーションの困難さから自閉症スペクトラムが考えられること、おそらく生来のものであろうと説明したところ、生後すぐからの不安が理解できたという表出がなされた。一般的に、乳幼児健診時に、疾病の確認や発達の心配に対応する体制はあると考えているが、地域差や、個々の症例の状況で、抽出は必ずしも一定ではない。保健所や保育園では研修で発達障害を知る機会があるはずであるが、個々の事例について具体的な対応をスムーズに実施するには、早期スクリーニングとして知られるM-CHATなどの活用を、健診に取り入れるなど、個々の対応によらない抽出方法の利用が必要と考える。医療機関からは発達障害の啓蒙の一つとして、受診後の経過をフィードバックできる機会があると双方向の連携が進むと思うが、時間や方法、経費など検討が必要である。

P1-035

自閉スペクトラム症のある青少年の作業遂行技能と自己効力感及び自尊感情との関連に関する研究

富士 しおり、高田 哲

神戸大学大学院 保健学研究科

【背景】

自閉スペクトラム症(Autistic Spectrum Disorder; 以下、ASD)児者は、作業遂行技能や感覚に問題があり、それにより生活全般に支障をきたすことや、自己効力感や自尊心の低下、集団からの孤立など二次的な心理社会的問題に繋がることがあるといわれている。しかし、職業選択や自己同一性の獲得に悩む高校生年代のASD者に対して、作業遂行技能と感覚、自己効力感及び自尊感情との関係を検討した報告はなかった。

【目的】

高校生年代のASD者の作業遂行技能と感覚、自己効力感及び自尊感情との関連を明らかにする。

【方法】

重い知的障害のない16～18歳のASD者と同年代の定型発達(Typical development; 以下、TD)者を対象とした。Assessment of Motor and Process Skills(AMPS)、日本版青年・成人感覚プロファイル、一般性セルフ・エフィカシー尺度、ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版を用いて測定し、ASD者とTD者での差の比較と各評価尺度間の相関分析を行った。

【結果】

1)作業遂行技能では運動技能・プロセス技能ともにASD者はTD者より有意に低かった。2)自己効力感及び自尊感情ではASD者とTD者の間に有意差は認めなかった。3)感覚面では「感覚探求」でASD者はTD者より有意に低かった。4)自己効力感・自尊感情と感覚との相関はASD者では「感覚過敏」との間に負の相関があった。5)作業遂行技能と自己効力感・自尊感情との相関及び作業遂行技能と感覚との相関はASD者では認めなかった。

【考察】

ASD者は高校生になっても作業遂行技能に問題があることが多く、作業遂行技能の評価や継続した支援が必要と考えられた。さらに「感覚探求」でTD者より有意に低く、自ら環境に積極的に関わるような活動が少ない傾向にあることが明らかになった。また、「感覚過敏」が自己効力感や自尊感情と負の相関にあったことから、感覚刺激に反応しやすいと不快感や混乱を生じ、対人面や集団生活で上手くないと感じて自己効力感や自尊感情が下がる恐れが示唆された。今回の研究では、ASD者の作業遂行技能と自己効力感及び自尊感情との間、作業遂行技能と感覚との間には相関がなかった。これはAMPSが他者評価形式であるのに対し他の評価尺度が自己評価形式であることから、自己の内面を顧みることを苦手とするASD者の特性が関係していると思われる。以上より、高校生年代に対しても作業遂行技能や感覚などの評価・支援をしていくことの必要性が示唆された。